

7—褥瘡(床ずれ)はあつて当然か

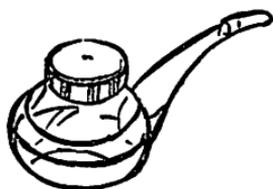
(1) 瘡のない身で死なせて——八木カオル(七三)

話しは四年ほど前になります。

私は脳軟化で倒れた主人を三年間看護しましたが、特養では風呂に入れて下さるとのこと、そうすれば少しは元気になるのではないかと、天皇陛下も行幸下さる立派な所に入れて頂きました。婦人団体の見学、その他の人も皆様きつと設備の立派さ、目のさめるような布団に寝ている老人を見て、こんないい所があるのかと満足して帰られたと思います。

さて、入所して一週間め、私が又行きますと、主人がすがりつくようにして帰るといつている様子。主人は口がきけません。

後で分かったことですが、ここの看護婦さんは眠っていると頬を叩いて起こします。当たりが強かったのでしょうか。その方が来るといやな顔をしていました。



直径五センチもある大きな褥瘡もできていました。同室の方が「お爺ちゃん毎晩うめいて皆寝られなかったよ」と。さぞ痛かったのでしょう。

私も引取らしてほしいと申し出ましたが、許されず、仕方なく私に付添いをゆるしてくれました。一昼夜二十四時間、四回のおむつ替え、時間がきまっています。その時以外は絶対にとり替えてくれません。取り替えは八人もの大部屋で、どっぴりと濡れた湯気の立つおしめ、大便も混じって臭います。長い間肌につけているのですから、つらいことでしょう。

そのうちの一人が便をさわったというて、寝台に手をくくりつけますよと、皆に聞えるようになっています。本人は悲しい顔をしています。

次は褥瘡の手当、全部にできているのですから、主人もその一人になりました。四つ五つとできている人、この方はもう長くはない弱った方です。

体位交換も三日に一度ぐらい。

向うから、おばあちゃんが私を手招きしますので、本人のいう通り寝ぐあいをよくしてやりますと、後で「頼んではいけませんよ」と叱られている様子。

食事になりますと、手が自由で食べられる人はよいのですが、終りの方は、幾らも食べさせてもえないうちに、片づけが来ます。衰弱して死を待つようなものです。

家族の方が見舞に来て、きれいな布団に寝ているおばあちゃんを見て、いいわねーと満足して帰ります。おばあちゃんはおきらめて何一ついわず死んでいきます。こんな悲しい最後を、皆様は覚

悟していらっしやるのでしょうか。不幸にして、コロリと死ねない人は皆この道を迎るのではないのでしょうか。

人生の最後を愛のある看病で、瘡のない身で死なせて下さい。これが一番大切な福祉ではないでしょうか（後に雑誌『月刊福祉』55・5月号に登載）。

(2) おむつ換えは特養のいのち

八木さんの便りに一日四回のおむつ換えという劣悪な処遇が述べられていた。こんなことは極めて特殊なことにすぎないだろうか。

まず、老人施設職員全国研修会（53・6・20於別府市）に参加した任運荘の寮母の感想文を見よう。

「分科会に分れ討議した際、気になっていたおむつのことを尋ねてみました。任運荘では濡れた時点でのおむつ交換を実行しています。ところが私の加わったグループの十一の施設、いずれも夜間のおむつ交換をしていないのには驚きました。普通、一日に五、六回と時間制で決められています。夜十時に換えて朝五時に換えるのは、ややましな施設です。それでも夜間は濡れ放しです。

「そんなことで褥瘡はできませんか」
「老人が気持ち悪いでしょう」と質問する私に対して、返ってくる答は何とも冷ややかなものでした。「夜はナイトショー」といいます。厚いおむつをT字

型に当てるから洩れたりせず、褥瘡もできないといえます。他のグループでは、#濡れた時点でおむつ交換などやっている、老人におしっこを我慢する力がなくなる”と逆に反論する施設長とおぼしき人もありました。この言葉が本当に老人の側に立った言葉とは思えません。老人の中には排泄機能が麻痺し、おむつを換えなければ一日中汚物の中に浸っていなければならない人も多いからです。いつも乾いたおむつを、という老人処遇の基本を忘れてはならないと思います。

ともすれば老人不在に走りがちな研修会。その片隅に起った小さな声が真に反映されるようになった時、本当の福祉社会と呼ばれるのかもしれませんが」(『にんうん荘』19号・53・7・1)。

「おむつが濡れたらすぐ換えてほしい」—これは本人にとっては何はさておいても欲しい、ぎりぎりの所からの要求である。ごちそうもいらぬ、何もいらぬ、せめてウンコ潰けだけからは救われたい。人間が自らの最後の尊厳をかけての訴えである。

「老人生活研究所」主催の寮母宿泊研修会(55・2・5〜7宮崎会場)でも同じことが繰り返された。夜七時半におむつを換えて朝六時までは絶対換えないという某県某施設の報告に、参会者大半が同じだという。任運荘の寮母は「どうもそれでは納得できない。老いてあなたがそうされてもよいの」と問うた。「そんなことは嫌だ」という返事。自分は絶対がまんしないが、人にはがまんさずという現実が、この福祉の世界で今公然と行われている。

老人ホーム関係者の間には随時交換、定時交換という言葉がある。おむつ換えの時間のとり方で

あるが、随時とは一定の時間を決めないで濡れたと思うたら換える、本当の意味は濡れたらすぐ換えるということである。定時交換とは一定の時間がくるまでは換えない。それまではウンコ潰けを我慢せよということになる。

全国調査結果は一応参考になろう。「時間を決めて」のおむつ換えが全体の八一・八%、それに対して「適宜介助」のおむつ換えは一七・七%。しかし、この適宜介助は必ずしも濡れたら換えるという意味とは限らず、適当に、ほどほどにと考えられたりもされよう。これは単なるアンケート調査結果にすぎないので不明確であるのは止むを得ない。

では「定時交換」での一日の回数はどうなっているか。定時交換の施設を二〇〇として、一日「五回」が最も多く四五%、「四回」は二九%。すると誰もが気になる「深夜のおむつ換え」はどうか。「していない」は五九・七%、「している」は三八・一%、無回答の二・二%をふくめて六割以上が「していない」である。ついでに、これを公立私立別に見ると、「していない」が公立では七六・九%、私立は五四・五%で、ここでも公私の差が出ている(上掲書58~59頁)。

細部にわたって老人ホームの「運営基準」を決めて示す厚生省すら、おむつ換えについては触れていない。全国的傾向は一日四、五回の交換にすぎないひどい状態であることを知っていないが、特養の基本に関わる問題であるのに、何の手も打っていない。福祉行政上これほど不可解なことはない。^{注1}

任運荘がたまたまおむつ換えだけはまじめにやっているから、自己宣伝のためにその非を鳴らし

ているのではない。関東地方の某施設では「十二単衣」と称してぐるぐる巻きにして、一日中横たえているという恐るべき報告もある。悲惨な姿になっている老人に代って、人権問題であるとして訴えざるを得ない。前節の八木さんの訴えに共鳴する同窓の河村無我さんを中心とする婦人が結集して、老人ホームの処遇改善の市民運動も始まっている(大分合同・55・3・6)。

深夜のおむつ換えをまだしていない施設があるとすれば急ぎ改めるべきである。老いておむつを当てるようになる、夜昼の区別はない。任運荘では深夜にその要求が増してくる。ひと恋いしさも交じった交換依頼だからである。それだけに、重症の痴呆状態でない限り、老人たちは「ありがとう」「ありがとう」と、寮母の動作の一区切りごとに礼を述べている。病すでに重い衰弱患者でさえ、寮母の作業を軽くしようとして腰を浮かそうと努めるのである。寮母の手はその心を鋭く感じとっている。それは森閑とした夜の、心の底にジーンとくる風光である。おむつ換えは永遠である。

注1 「昭和五十五年度社会福祉施設指導監査の実施について」(厚生省監査指導課)で、都道府県が行う指導監査の重点を指示して、「入所者の処遇確保」の項目では具体的には食事と入浴介助についてのみ触れているにすぎない。

また、厚生省自らが実施した五十四年度の監査結果の問題点として、「入所者処遇が不十分」といっている項目は、具体的に十あるが、おむつ交換や床ずれの有無については全く触れていない。

注2 この運動は調査活動を伴ううちに必然的に在宅老人のための福祉充実へと発展する。河村さんは

その調査データを基に自民党婦人部九州地区大会(55・10・20)で訴え、介護手当支給を中心内容とする提案をし、採択される。ようやく全国的地歩を固める。なお、「妻の財産」が、やっと法制上確立されるが、その原動力として彼女の十六年間のたったひとりの闘いがあったことはあまり知られていない。

(3) 床ずれ只今ゼロ

任運荘がしている「褥瘡との闘い」を、副園長北崎が皆の意見を取りまとめ、月刊『老人生活研究』(54・11月号)に「特別養護老人ホームに褥瘡はあって当然か」という題で発表した。重複する点もあるが、ほぼ原文のままここに転記して、施設における床ずれの問題への解答としよう。

旗じるし

「経営するなら老人ホームは小規模で、内容は清潔に、そして行き届いたものにしたいたい。社会福祉法人「任運荘」の理事長は、老人処遇について全く素人の私たちにそう強く願った。いわば、この言葉は「任運荘」がその出発に当たって、ひそかに心の中に掲げた旗印である。

だから、開所と同時に仕事は褥瘡(床ずれ)との闘いから始まった。素人だけの集団であったからそれは誰も予期しなかったことである。ということは、五十年五月、五十名定員で出発した時、十

五名の寝たきり老人のうち十二名が床ずれの傷を持ったまま、どっと入ってきたからである。家庭から来た七名の床ずれは看護の未熟さから出来たもので仕方がないが、病院や施設から移されて来た五名については、「どうして？」と憤りと疑問を抑えることはできなかった。ひどいになると直径十三センチの傷で背骨が見えている。恥ずかしくもなく送りこんだものだと思った。

「床ずれができたらもう死ぬ」と信じこんでいる寮母たちに、私は「床ずれを治したら一人前の寮母だ」と力づけ、また、寮母たちも治すことを誓いあった。

処置方法としては、熱いお湯で清拭してマーキュロで消毒、苦痛を与えない体位交換、おむつ換えのたびのマッサージ、日光浴のためのベッド移動、シーツや衣類のしわのぼし、調理場では食欲をそそる特別食の工夫。

老人は身体を動かされることへの不満で、初めは憎しみの眼ざして見るが、やがてすすんで協力し、励ましの言葉には「ありがとう」とほほ笑む。こうして一進一退、ついに一番の重傷も三カ月でよくなった。「床ずれは治る」と、寮母たちは自信をもった。当の老人たちも「自分は死なない」と、生きることへの意欲が新しく芽生えてくる。

概して、出発したての施設に対しては、重傷者が待っていたとばかり措置されてくる。施設や病院で困り果てた人たちをお払い箱のごとく、知らん顔で送りこんで来る。しかし、初めに重度の老人を世話する経験は、何よりも貴重である。それは、もうどんな最重度の人が来ても大丈夫だという自信が、寮母たちの間に生まれているからである。

▽濡れたら換える

褥瘡との闘いは、しかし、おむつ換えが基本である。老いての一番の不安はおむつを当てるようになることである。いつも乾いたおむつが老人の肌を包んでいる。——それが処遇の基本である。それをしも寮母にとっては酷な要求であるとするなら、その特養は出発点ですでに挫折の道を歩んでいるといわれよう。研修会で私たちの頻繁なおむつ換えが話題になる。「ほかのことは何もできないだろう」などといわれる。おむつ換えは一回三分、二十回でも一時間にすぎない。個人差があるが、平均一人九回でいどである。ウンコ漬けにするから、取り換えに時間がかかり、眼もあけられないほど醜態もする。床ずれがあればなおのこと時間もかかる。

おむつは各自のベッド傍のロッカー下段に出し易いように重ねておかれている。県の監査の時、おむつ置き場所が見たいといわれた時、私たちはその着眼を老人のために喜んだ。監査では利用者への直接処遇の実態を調査するなどということはめったにないから。

五十四年八月現在で、五十名中おむつ使用者二十二名。うちナース・コールや呼び声で知らせるのが十四名。あと八名は意志表示が全くできない。

見学に来た某施設の職員がどうしたわけかなかなか寮母室を退出しない。後で分かったことだが濡れたら本当に換えているのか疑わしく思っていたからである。おむつ換えを終わった寮母が手を拭きながら、おむつ交換日誌に記入する。「、」印はおむつに手を入れたが濡れていなかった。「○」印はおむつを換えた印である。それを見届けた彼はやっと納得したらしい。寮母たちは全老人の体調

を知っているから、ほかの作業をしながら濡れたら換えることができるのである。

四名あるいは二名の同居部屋であるので、おむつ換えでは間仕切りのカーテンがひかれ、眠っている老人にはそつと肩に手を置き声をかけて換える。おむつ枚数は三枚、木綿に限られ、清拭後乾いたタオルで拭きあげ、軽くシツカロールをはたく。

▼おむつはいのち

深夜ナース・コールが鳴る。手を入れてみると濡れていない。濡れていませんよと布団の衿を叩いて立ち去ろうとする寮母に、「バカバカ」と言語障害の老人はやっと意志を伝える。我に返った寮母は新しいおむつを出して当てる。ひんやりとした感触が心を静めたのであろう。「おおきに」と返ってくる。長い夜、人恋いしさも加わっておむつ換えを訴えているのである。

しだいに失明した八十八歳の老人は幾度も自殺企図をくり返していたが、おむつを当てるようになったら、ふしぎと日常生活は落ち着き、夕食の一杯の酒に歌を口ずさむのである。痴呆状態の老人も「わしはおむつを当てるに死にたい。寮母さんに優しくしてもらうて」と涙をためていう。

急性下痢で二カ月おむつを当てるにいた老人は、それまでは弱い人たちを小馬鹿にしていた。熱いお湯で清拭される度に生き返る思いがするという。回復した今では、今までの行動を恥ずかしがり同室の人たちの世話をしたり、おむつたたみにも参加するようになった。老人たちは日がな一日、寮母たちのすることを眺め暮らしている。いつの日か、自分のその境遇を予想しているようだが、おそらくここではおむつを当てることへの不安はないだろう。

おむつ換えを少しでも合理化し、回数を減らそうとすれば、ますますおむつ換えはきたなく、嫌になるばかりである。私たちはおむつ換えを老年の命を扱うことと同じと考えている。だから、おむつの洗濯にも寮母の心がこもらねばならない。初め専任の洗濯者がいたが、寮母たちは得心のいく洗濯をして老人の肌当たたいと申し出て、寮母が輪番で洗濯するようになった。さすがに手をぬくと、忽ち肌に発赤が生ずる。一日のおむつの使用枚数六百枚、衣類百五十点、大型自動洗濯機と乾燥機で処理するが、おむつの汚物は別に特殊洗濯機に入れ、熱湯消毒、臭気抜き洗いをしてから、大型洗濯機に移す。

消毒薬としてクレゾールを使用していたが、臭気も強く布も固くなるので中止し、八〇度の熱湯消毒を二回行う。伝染性疾患者の使用したものはクレゾール三％液に十二時間浸す。

▽終末期の褥瘡は

生命が終末に近づくと、ふつう点滴に頼る。衰弱しきった肉体は点滴を十分消化しえず、水分をびっしょり含んだ雑巾のように、下方に降りて圧迫部位が壊され、褥瘡となって治ることがないともいわれる。私たちの経験はその説にも賛成できない。

臨終が近づき嘱託医が家族を呼ぶように指示する。何時もと違って、寮母室の空気が変である。「病人に褥瘡ができていく」という夜勤寮母の報告で皆が顔色をかえていたのである。入所した時のがやっと治って半年すぎた今となって、と職員は悔しがる。

「床ずれのまま死を迎えさせては相すまない」と会議が開かれ、全員が介護に当たる。寮母室

の隣りの静養室に移し、絶えず水分を補給し、声かけとスキンシップで励まし、調理場は栄養食とビタミン補給に意を注ぎ、時間外でも注文に応じてくれ、「今日は気分はどうな」と心配する。

某日、休み時間ある寮母がいない。探しあてたら、静養室で円座代わりに両手で傷をうかしている。そうしないではいられない空気だった。点滴が少しずつ静脈に入るようになる、病人の腫も寮母の姿を追うようになり、終末を宣告されたが、傷は一カ月でよくなった。それから一カ月、寮母たちに薄化粧されて新しい旅立ちをしていった。

後日、家族からの便りの一節に「百姓が忙しく床ずれをつけたままホームに預けて心苦しく思っていました。姑の体には傷一つないのを見て、お世話が大変だったと思います」とあった。

▽手抜き処遇

褥瘡を治すことの大変さは寮母、看護婦が一番よく知っている。だから、こうして開所して三年はそれがこゝでつくられることはなかった。しかし、寮母たちの心のゆるみか、仕事の馴れか、それは直ちに処遇に現れた。

五十三年九月頃、寝たきりのうち三名につきつぎに床ずれができた。ショックが寮母室内を走る。終末期に入ったA婦人(八八)の仙骨部と両腸骨部に傷ができていた。手当法は看護婦が中央研修会で新しく習った方法に変わった。生食塩水で患部をこすり出血させ、肉の盛り上がりを待つ方法で講師の医師が褥瘡手当の唯一の正しい方法と主張したもの。しかし、患者は患部をこすられるので痛がり、傷を破るので治癒ははかばかしくない。B老人(八四)の仙骨部にも発生するが、寮母側か

らこの新しい方法に疑問が發せられ、會議が頻繁にもたれる。

「ゴム製の円座は口金で傷つけやすい」「発泡スチロールは静電気を起こして悪い、ソバガラを使おう」「栄養食は高カロリーのメデイエフ、水分、ビタミン補給は頻繁にする」などの提案が出る。

反面、開所時十二名を完治させた経験は、看護婦の用いる方法に強く批判的になり、ついに、「褥瘡を作ったのは寮母だから、寮母に処置を任せてほしい」と申し出る。すると、看護婦側からは「私たちに治せないものだから任せられないのか」と、暗い対立が室内にこもってくる。両者は同室で勤務しているので、寮母が看護婦に薬名を聞いても、「そんなことも知らないでよくも治そうといえたものだ」という態度が見える。

「寮母は責任を感じているし、看護婦は技術があるのだから、傷に苦しむ老人のことを考えれば協力するのが本当の責任のとり方だ」などと、やがて意見は一致し、両様の方法をとることに決まる。A 婦人には看護婦が当たっていたので食塩水と軟膏治療、B 婦人には寮母が従来のマーキエロで処置をする。ビワ葉のエキスが傷に効くという入所老人の提案も試みられる。意外にもこれは効果的で、乾燥状態をもたらず。こうしてB 婦人は十一日で完治。看護婦側もA 婦人に寮母と合同の処置で四カ月かかって治すことができた。

その最中、胃潰瘍のC 老人(八〇)が吐血し点滴が午前午後と続き、再度の吐血を恐れて体位交換が十分できず、一晩で水泡ができ、破れ、七センチの傷となる。しかし、その頃はもう治療法上の

対立はなくなっていたので、C老人の傷も日に日に小さくなっていく。その妻は隣りの老人ホームから毎日会いに来ては、「よかったね、子どもがなくなってもこんなに優しくしてもらえる」と語り続ける。

点滴も入らなくなり、水分補給をすれば吐血する老人になすすべは、声をかけ、手足をさするだけである。「おじいちゃん、きついなー、ごめんなー」といえば、意識のまだ残る力でうなずいてくれる。消化管出血のため水分補給ができなくなって、わずかに唇をしめすだけ。やっと、傷にうすく表皮ができてきた。ホットしたのも束の間、ついに昇天した。

あの点滴のための二時間、その間の体位交換のできなかったためにできた水泡、それが悔まれてならない。特養ホームでは老人が帰らぬ旅へ出で立つのはそう特別のことではないが、寮母たちの遺体の手をとってわびる声は常とは違って悲痛をこめていた。

こうさまさまとあったが、元のように「褥瘡ゼロ」になった今、隣りの静養室から聞こえてくる夕食介助で語りかけていた声が、今もさやかに蘇ってくる。

「おばあちゃん、ごめんなー。さあ、これを食べて傷を治そうなー」ひと口与えてはゆっくり飲みこむ老人の手をそつとなでているのであろう。「少し油断をしてごめんなー」と声は小さく続いている。

▽批判の中いそ

従来「特養では褥瘡はつきもの」という考えは強く、研修会でもそれ程話題にならなかった。し

かし、五十四年三月県下の研修会で褥瘡について発表した。それがきっかけであろう、施設関係者の来訪がふえ、意見の交換や実習なども少し行われた。後日、そのうちの某施設が「褥瘡がなくなつた」と発表していた。

五十四年七月五日、九州地区の老人福祉施設研修大会（長崎市）で、「伝染性疾患と褥瘡について」と看護婦が小さな実践報告をした。質問が集中し、「褥瘡現在ゼロ、寝たきり一名」と答えると、会場にざーっとどよめきが流れた。「それはおかしい」という非難めいたものがその中には含まれていた。ある施設長はいう。「特養に寝たきり一名など、甘い措置をした福祉事務所の責任だから」と。それは一応構わないとして、褥瘡ゼロはおかしい。私の施設でさえ五、六名はいるのだから」と。手厚い処遇をしていることへの自信満々である。たぶん、特養としては一番古いほうだからだろう。

それだけに特養における褥瘡論は処遇の基本に関わる問題であると、改めて考えさせられる。なぜ褥瘡があつて当然だろうか。かりに、晩年、自分に床ずれがつくられても黙って耐えることしかないだろうか。私たちは「ノー」と断乎主張したい。

任運荘の寮母室で某施設の職員が「体位変換を頻繁にすると延命にならない」と忠告をする。寮母たちは後で話しあつた。「その施設の老人は気の毒に思えてならない」。また、あるひとは非難した。「褥瘡の手当を完全にすれば処遇は低下する」。職員定数の現行の低水準下では、一考を要する内容を少しはもっている。しかし、私たちはいかなる理由があつても、頻繁なおむつ換えと褥瘡ゼ

口は特養の最低必要水準であるということを譲ることはできない。褥瘡を治したいという寮母の願いは、終末の老人にも治りたいという願いとなり、そこに共感の世界が作られ、処遇はマイナスどころか、ホーム内にビーンと張りつめた活気がみなぎる。

ともあれ、私たちは一つの発表を契機に、賛否の渦に入ってしまったようだ。法人のひそかな願いの「行き届いたお世話を」という旗印は、今や具体的に「褥瘡ゼロ」の旗印として掲げねばならなくなった。これからの長い年月の前には「褥瘡があるのは仕方がない」などと旗を下ろすことがないとはいえないが、「褥瘡ゼロ」という旗印は、試みるに値するということだけは疑いない。

▽寝たきりは作られたもの

「寝たきり一名」という表現にはたしかに問題はある。寝たきりという言葉の内容が人によって違うからである。先に述べたように、開所時に最重度の老人が次ぎ次ぎに措置されて、私たちは悲鳴をあげた。見かねた先輩施設経営者から、事前面接という形で入所者選択をしたらとすすめられた。しかし、「福祉事務所から依頼される者は無条件に受け入れる」という方針が貫かれてきた。だから、福祉事務所が当施設にだけ甘いなどということはない。

五十四年五月二十二日より全国生活指導員研修会が東京スポーツセンターで行われた。あるグループで「寝たきり老人には、寝たきりにさせておくのが最高の処遇である」という者があり、しかも賛否相半ばしていた。動かさないから動かないのであり、本当は動きたいであろう。その証拠に初めて動けた感動を語る老人の表情は生き生きとしている。寝たきりの殆んどは看護の煩わしさか

ら作られる。

任運荘では農繁期だけ数名の一時預りを開所以来続けているが、きまったように、「わしは動いたらいけんといわれ、何もせんでもよい」と、生活の全介助を要求する。でも、自分より明らかに重い老人が食事やリハビリに努力しているのを見て、やってみようとの意欲が芽生え、十日間の退所時にはおむつもとれ、歩行器につかまって歩けるまでになる。勿論小さな褥瘡も治っている。

このホームでは一人だけが医師から動かすことを禁止されている。それ以外の重い老人はおむつや尿器使用で二十二名、そのうち車椅子に移動させてもらい運転できる者八名、介助されてある時間車椅子に乗っていられる者十名。短時間しか乗ることのできない四名は一日数回ベッドに起こし食事、体位交換、清拭を行う。ひとりで歩けない二十二名は、広場でのリハビリ・入浴・戸外散歩ドライブ・買物・行事等の参加を積極的にすすめる。このような状況の人たちを、他の施設では寝たきりと呼んでいるのではなからうか。

寝たきりで担架で入所してきた渡辺キオさん(八七)は車椅子に乗せると眼が回ると拒否していたが、やがて百メートルを運転できるようになり家族を驚かせた。終末状態を二度も経た倉原モカさん(八四)もそれを見て、「わけへだてをする」「車椅子にのりたい」と腹をたてるほどである。

寝たきりを作らない。それは褥瘡を作らない心と全く同じであることに、私たちは気づかされる。同時にそれは「おむつを外す」運動とも同一の心の上に立っている。

▽小さな光り

終りに、熊本市の慈愛園乳児院院長、潮谷義子さんからの便りの一節を掲げよう。

「個々人に対する温かい配慮と、ひとりひとりに合う処遇の積み重ねが集団の流れを変え、集団の姿を形づくっていくのだというごく当り前の大切さ、しかも、それは卓越したテクニクではなく、個を思いやる人間性のあり方だと思えました。しかし、現実には本当にごく当り前のことがなおざりにされ、集団が先行して個人がリズムにはめこまれてしまっています。

集団では仕方がないと明言してはばからない職員の多い今日、この記録は老人ホームだけの問題ではなく、福祉施設に働く者の基本問題として受けとるべきではないかと思えました。この記録を読んだ老人ホームの奥さんが「気持ちとしてはすごい、よくやるなー」と思うけど、「やらされる職員は過労よ」と。ここにもまた問題があります。愛する仕事のために働き人は「やった」のに、やらされるという見方があったのです」。

この心打つ便りを読んだ寮母たちはいう。

「開所時、褥瘡という名前も知らず、大変なことをやらされると思った。が治った時の感激、そして、自信。今までやらされているなど考えたこともない」。「老人の表情が眼にみえて明るくなるから、やらされるなんて思いもつかない」。「他の施設に勤めていたら、床ずれは作られて当然と考えていたかもしれない。床ずれを作らないことへの努力で毎日が充実しているのが有難い」。

ここでは、世話する者が世話される者を通して、大きく日々を生かされている。だから、世話される者が反面世話をしていることにもなる。誰が生かし、誰が生かされているか。お互いが生かされ合う世界が、この小さな現場に、小さいままに光っているような気がしてならない。

(4) おむつを外そう

特養ホームにおいて寝たきり者の多いことが、いかにも介護の重さを証明するというような表現は、必ずしも正当ではない。

寝たきりにすると、どうしてもおむつにくるんでしまう。おむつを当てるといふことはいかにもよい介護のように見えるかもしれないが、作られた寝たきりのおむつ換えは、当然、時間を決めてのおむつ換えになる。その時間はおむつをしている老人の排泄の都合で決めるよりは、介護する者の都合に合わせてするのが普通であろう。「濡れたらすぐ換える」などんでもないことである。

それに反して、寝たきりを作らない介護の努力は、おむつを当てるようになる時期を一刻でも延ばす努力である。だから、ここではおむつをするようになれば、当然、おむつが濡れたらすぐとり換える介護として表現される。また、おむつをあてていても、できるだけ外そうとする努力も併行して進められているものである。

任運荘でおむつ生活を余儀なくされていた者の数は最高で二十六名（昭53年度）だったが、現在（昭55年5月）は十八名である。五十五年三月は二十五名であったが、四月から意志表示のできる者の中から十名を選んではずしていった。一応は成功したが、特養の性格上、老衰等によって再びおむつにかえってしまう。それが三名である。

藤原さん（女）は入所当初はおむつ使用、歩けるのでトイレ利用をすすめたが、どうしても応じない。しばらくして食堂で食事をするようすすめたら、「おしめを外さにやなあ」といい、食堂にもトイレにも行くようになった。このおむつ外しが三年余り続いた。しかし、骨折し、再度おむつに戻ってしまう。

普通の人は二時間毎の排尿だが、彼女はその時間が長いので、多量になり、からだをびっしょり濡らしてしまう。尿器使用の余地がまだ残されているので、尿意を訴えなくても一時間おきに尿器を入れているが、拒否し続けている。

もうひとりの男子老人は幾度となく試みて、おむつを外したり、したりの繰り返しである。性的なスキミングを満たす手段としておむつを希求しているから、ケースとしては難しい。排尿の感覚はまだ残存しているが、「おむつをしてくれ」一本やりのナース・コールの押し放しである。夜間などその頻繁さとけたたましさに負けて、おむつをしてしまう。

尿器使用に成功した五名

おむつを外せば尿器かポータブルトイレを室内で使用しなければならぬ。だから、そのためには本人の協力と意志の強さが必要となる。寮母の苦勞もおむつ換えの時の比ではない。一たんおむつにくるまる生活になると、ふしぎとおむつから離れることはつらいとさえ思うようになる。とくに任運荘のように、濡れたら換えるとなれば、快感も伴うのでなおさらである。しかし、それに妥協してしまうと、きまって急速に痴呆症に陥っていく。おむつをし始めた頃のあのくやしきなど忘れてしまっている。だから、意識がまだしっかりしている者はどうしてもおむつから離さねばならない。反面、意識があるだけに難しい場合が多い。

佐藤さん(女・七三)もその一人。「おしっこをしかぶったら恥かしい」と強く拒んでいた。当分はおむつを腰に敷いておいて、知らせによって尿器を当てる方法をとった。でも失禁が不安で、ナース・コールを激しく鳴らす。寮母室の近くに部屋がえをすると、ようやく落ちついてきて、成功する。夜になると「おむつをあててくれ」と頼むのだが、「心配しないでいいのよ」とたったひとりで安心する。

渡辺さん(女・八八)も電動車椅子を動かすほどの力は残っているが、「そそうしたらどうしよう」と不安がり、尿器をさし入れると痛がって叫ぶ。痛くないよう柔かく包んでいるのに。仙骨部に発赤が出来だったので、ようやく便器使用に協力し、発赤も完治した。おむつから便器使用に移ったしばらくは、用を足すのに時間がかかり、寮母が傍で待っているとますます排尿が困難になる。寮母によっては立ち去ったふりをして、廊下のかげで待つ心優しさを秘めている者もいる。「おし

っすするのむひと仕事ですな」という顔は晴れ晴れしている。

森迫さん（八二）も同じ経過を辿った。「もらしたらせちい。おしっこのことばかり考えているので、おなかがつまってしまう」と情緒不安をくり返す。おむつをする寮母、励ましてはまず寮母、まぢまぢだが、発赤が出たのでやがて意見も統一され、何度も逆戻りしながら、ついに成功。「やっぱりこの方がいい」と尿器使用に誇らしげである。

ポータブル便器使用は二名

衛藤さん（八七）は自分で起きることができるので、尿器使用から室内持込みの便器に移るようになった。看護婦がいう。「ナース・コールを押してから、寮母さんが来るまでに起きて下さいね。すると、さっとポータブルに坐れるでしょう」と。それぐらいのことはまだ出来るからである。彼女はすぐに返す。「みんなはあんたごとと狂わんで。出来んからこそここに来ちよるんじゃ」。「狂う」というのは狂ったようにガミガミいうことらしい。

しかし、ポータブルに坐らせ、ベッドに寝かすと、「おおきに。すまんない」といつてくれる。

石原さん（八二）は自分からおむつ外しを申し出た唯一の人である。ここの特養入りを養護からの転落と思いつめて、失意のどん底にあったが、「あなた以外に誰がご先祖の供養をするの。頭張らねば」という言葉で、彼女は立ち直った。天涯孤独の身であるから。今は「一日、一分でも長生きし供養をせねば」と明確な決意に生きる日々で、寮母の尊敬する数少ないうちの一人でもある。

注 五十年五月より五十五年八月一日までの五カ年数月の間で、死亡者退所者現存者合計百六名が総利用者数である。

そのうち、「始めからおむつをしない」のが六十四名、「始めからしている」のが四十二名。

していない者(六十四名)のうちから「する」ようになるのが四十四名。その四十四名から再び「はずす」のが三十二名。そのうち再度「おむつをする」のが二十四名。

入所時から「おむつをしていた」のが四十二名。やがて「外す」のが十三名。「外せない」が二十九名。二十九名のうち二十七名が便器などを使用して何らかの試みを幾度もしている。結局、「全く外せない」のは、意志伝達の全く不可能な脳軟化症で激しい失禁状態が続いた二名にとどまっている。

— 以上は百六名を一名ずつチェックして得た調査結果である。